

## 日本統治下朝鮮の製造業生産統計の整備

—— 紡織工業（旧日本産業分類）を例として ——

溝 口 敏 行\*  
原 康 宏\*\*

### (1) 問題の所在

日本統治下の「朝鮮」<sup>(1)</sup>における経済発展の研究は、近年公表された落星台研究所の推計<sup>(2)</sup>によって大きく前進した。歴史統計を国民経済計算の枠組みに沿って整理・分析することを目指す研究は、国際比較を念頭において進められてきており、多くの成果が得られている。落星台推計<sup>(3)</sup>はこの流れを朝鮮経済に適用したものであり、既存の研究<sup>(4)</sup>をも踏まえた総合的研究とあってよい。日本統治下朝鮮の主要産業は農業と鉱工業である。このうち、農業については、主として農業経済学者による統計の吟味が行われており、落星台推計もこれらの結果を踏まえたものとなっている。鉱業統計についての既存の研究は少ないが、鉱業統計が行政への届け出に基づいた全数調査であることから、比較的信頼できる統計と考えてよい。このことから、製造業統計が整備されれば、かなりの程度まで日本統治下朝鮮経済の動きを把握することができる。

第2次世界大戦前の日本およびその旧植民地における製造業生産関連統計は2種の調査体系によって支えられてきた。その第1は、行政機関を基盤として構築された統計報告制度によるものであり、品目別の生産金額および生産数量が得られる。第2の調査は、工場の経営状況に関する調査の一部として生産数量、金額が調査されたものである。これらの調査結果のうち、旧植民地に関するものは、『台湾総督府統計書』、『朝鮮総督府統計年報』等に掲載された<sup>(5)</sup>。原（2008）はこのデータを使用して2旧植民地に関する製造業統計を吟味し、国民経済計算体系の枠組みにそった推計<sup>(6)</sup>を行ってきた。その結果によれば、台湾についての調査は時系列的にみても安

---

\* 広島経済大学名誉教授

\*\* 広島経済大学非常勤講師

定的な動きを示していた。すなわち、品目別にみた生産数量、生産金額を年毎の動きをみても、「異常」とみなされる変化を示す品目は少数であり、それをチェックするために計算される実効単価にも極端な変化がみられなかった。さらに、『台湾総督府統計書』の数値が事後的に整理されて、『台湾工業統計』に取りまとめられていることから、ミスプリント等のチェックが可能であることも安心感を与えてくれた。

これに対して朝鮮の製造業統計には2つの問題が提起されてきた。第1に『朝鮮総督府統計年報』（以下『年報』と略記）に掲載された統計表が、一部の年次で公表形式が簡略化されているために、品目別の生産数量や生産金額が時系列として把握できないことである。これに対応するために溝口（1975）では簡略表で補充する間接推計を行っているが、十分な成果が得られていなかった。この問題に対して、解決のための有力な情報が落星台推計によって提供された。すなわち落星台推計で製造業を担当した朴基柱（2006）は、『年報』に欠如している統計表の大部分が、朝鮮総督府刊行の『朝鮮総督府 官報』（以下『官報』と略記）と京城商工会議所刊行の『朝鮮経済雑誌』（以下『経済雑誌』と略記）に掲載されていることを指摘し、品目別全朝鮮生産数量、生産金額値を利用することによって推計精度を大幅に改善した。<sup>(7)</sup>

第2の問題は、実質生産額を計算するため必要な実効単価（生産金額を生産数量で割ったもの）に関連している。『年報』等から得られる品目別の実効単価を時系列として比較してみると、全体としては緩やかに変化する傾向が見られるが、かなりの数の品目について異常な変化もみられる。この事実はSuh（1978）でも指摘され、実効単価を利用したデフレータのかわりに、少数の主要品目についての物価調査を使用したデフレータを作成し実質値を計算した。一方、落星台推計では実効単価の変化率の絶対値が一定水準を越えるものを、デフレータの計算から排除する工夫がとられた。原（2008）では第2の問題に対処するために道別データを利用することにより道別に異常値を検出し、修正することの試みを行ったが、検討は『年報』の情報が見られる1930年から1940年に限定されていた。本論の目的はこの作業を1910-1940年の期間全般に拡張し、道別の時系列データを整備することにあるが、1929年以前に作業範囲を拡張する過程で、いくつかの新たに検討が必要とされる問題が発見された。そこで最初に、利用されるデータ（『年報』、『経済雑誌』、『官報』）の状況を整理し、その後旧日本産業分類による紡織工業に属する品目を例として、発見された問題点を明らかにする。

## (2) 基礎データの状況

既述のように、原(2008)の作業では、1930年以降について『年報』に示される数値を吟味し、その数値に補間、修正等を加え、戦後の統計への接続のため国際標準分類へ組み替えを行った。この作業で作業期間を1930年以降としたのは、当該期間について『年報』に示される品目が比較的詳細に得られることに加えて、その品目に関する金額および数量が得られることから、名目値・実質値の計算が可能であることにあった。この作業を1920年代以前について拡張することを考えた際に問題となるのは、『年報』に示される品目分類が粗くなることに加え、1919年～27年の9年については『年報』から得られる情報が金額のみとなるため、特に実質値の計算は困難な状況にあったことである。幸いなことに、この期間のかなりの年に対応する金額および数量の情報が、『経済雑誌』および『官報』から得られることが、朴(2006)によって指摘された。

本論の目的は『経済雑誌』および『官報』を利用して1920年代以前についても作業を拡張し<sup>(8)</sup>、1914年～40年の統計を整備することにあるが、以下では、1 利用されるデータ、2 紡織工業についての作業を例にして、そこで発見された問題について整理を行う。

最初に『年報』、『経済雑誌』、『官報』からそれぞれ得られる情報の種類をまとめると表1が得られる。なお同表で「戸数」と表示してあるのは、当該品目について製造を実施している事業所数を示している。

表1をみると、『経済雑誌』および『官報』から『年報』では得られない数量と製造戸数に関する情報を利用できることがわかる。これらの統計表は出典の種類によって表記の方法が異なっているだけでなく、年によっても表の構成が異なっているため、利用には注意が必要とされる。そこで以下では統計の表記方法について整理を行うこととする。

『年報』の表の構成は、表の縦に品目が、横に道別(13道)の数値と全朝鮮値としてそれら13道の「合計」値が示される。道の名前は、表の最初に一度、全ての道の名前が示され、生産のない箇所は「—」で表記、数字は算用数字で表記されている。(数量、製造戸数が表記されている年については、対応する品目について金額、数量、戸数の順に縦に並んでいる。) (1911年、1914年を除く。)

例外である1911年については、上記の構成の表を縦と横をそっくり入れ替えた構成となっている。1914年では縦書きの表であり、数値も漢数字で示されるほか、エスニック別に数値が得られる等、表の構成が大きく異なる。

表1 統計資料から得られる情報

年	『朝鮮経済雑誌』	『官報』	『統計年報（工産品）』
1911			金額、数量、戸数
1912			×
1913			×
1914			金額、数量、戸数
1915			金額、数量、戸数
1916			金額、数量、戸数
1917			金額、数量、戸数
1918			金額、数量、戸数
1919		金額、数量、戸数	金額のみ（合計のみ）
1920		金額、数量、戸数	金額のみ
1921			金額のみ
1922			金額のみ
1923	(原表未確認)		金額のみ
1924	金額、数量、戸数		金額のみ
1925	金額、数量、戸数		金額のみ
1926	金額、数量、戸数		金額のみ
1927	金額、数量、戸数		金額のみ
1928	金額、数量、戸数		金額、数量
1929			金額、数量
1930			金額、数量
1931			金額、数量
1932			金額、数量
1933			金額、数量
1934			金額、数量
1935			金額、数量
1936			金額、数量
1937			金額、数量
1938			金額、数量
1939			金額、数量
1940			金額、数量

(注) 原表未確認は朴論文で存在が指摘されているが原表を未入手なもの。

一方、『経済雑誌』は、縦書きの表であり、数字も漢数字（例えば「一七九、八二七」）で表示され、左から右へと読んでいく形式となっている。『経済雑誌』では、個別品目ごとに「数値のある道」の道名が示され、その道に対応する数量、金額、製造戸数の数値がエスニック別に示される。『官報』は、『年報』の縦と横を入れ替えて縦書きにした形式の表となっている（『官報』では『年報』と同様に、表の最初に一度、全ての道の名前が示され、数値のない箇所は「一」で示される）。また数字は、『経済雑誌』と同様に漢数字で表示されている。その他に『官報』の特徴とし

て、表が「(エスニック) 合計」, 「内地人」, 「朝鮮人」, 「外国人」の表として個別の表となっていることであり、これらの表のそれぞれから品目別、道別に金額、数量、製造戸数の情報を得ることができる。

つぎに、『年報』と『経済雑誌』, 『官報』に見られる品目と数字の対応関係について整理を行う。先に述べたように、『官報』および『経済雑誌』からは、『年報』から得られる品目別、道別の情報と全朝鮮合計が、さらに詳しくエスニック別に示されている。

幸いにして、1928年では『年報』と『経済雑誌』の両方が用意されているのでこの2者を比較することができる。そこに見られる品目は、『年報』, 『経済雑誌』ともに、その掲載される順番も含めてほぼ一致している。ただし、『年報』に見られる「燐寸軸木」の金額、数量が『経済雑誌』には示されていないこと、「綿糸」の金額は両方に見られるものの数量については、『年報』のみに示されること、同様に「(生産金額の) 合計」は『年報』にのみ示されていること等の若干の違いが見られるほか、それぞれ対応する品目名が若干異なっている等、多少注意しなければならない点も見受けられるが、それぞれに示される品目については対応しているといえよう。次に、それぞれに示される数量および金額に関する具体的な対応関係をみると、完全に一致している品目が存在する一方で、一致していない品目も存在する。これらの一致していない品目について、その原因はいくつか考えられる。断定的なことはいえないが、例えば『経済雑誌』でのエスニック別に示される統計を合計した際に発生したと思われる計算ミスのためや、<sup>(11)</sup>『経済雑誌』での計算は間違っていないが、『年報』にまとめる段階で、データが追加されたためなどである。ただ、例えば「粗布および細布」の品目に見られるように『年報』と『経済雑誌』の数値の違いが「多くの道」で見られ、それが計算ミスやデータの追加以外の原因によって異なっていると考えられるものもあり、これらの品目では『年報』の数値とのつき合わせが考えられる。また総合計の値が一致していないこと（例えば、1925年の総合計について『経済雑誌』では231,428,146円に対して、『年報』では、295,204,980円となっている）にも注意が必要である。両者を比較するといくつかの不一致も見られるため、そのままの形で利用することはできないが、かなりの部分では一致しているといえる。

一方、『年報』と『官報』を比較すると、1920年について、両方の合計が一致（全朝鮮合計金額1920年：231,445,587円）するほか、繭製品、織物、紙及び紙製品等での品目レベルで品目が一致する。『官報』ではさらに細かいレベルでの品目が示され

るが、例えば繭製品では、生綿、生皮苧、蛹襯、柞蠶糸の4種類とそれらの合計として「計」が示される。表2では「計」を除いた4品目が品目数としてカウントされている。1919年については、『統計年報』では品目が一切示されず道別の総合計しか得られないため『官報』の値の利用が重要視されるが、両統計にみられる全朝鮮合計金額が一致すること（同：1919年：261,222,249円）、さらに『官報』の1920年と1919年に示される品目名、品目数が類似していることから、『官報』に示される1919

表2 『官報』（1920年）の金額系列数

1920年 『官報』	金額の系列数	1920年 『官報』	金額の系列数
繭製品	4	穀粉	3
織物	8	澱粉	※
編組物	5	干麺類	※
紙及紙製品	13	飴	※
窯業製品	8	菓子	※
金属製品	9	蜂蜜	※
機械類	3	瓶詰及缶詰	4
石器類	4	ハム	※
木製品	5	清涼飲料	※
漆品	※	乾海苔	※
竹製品	※	寒天	※
櫛	※	人造氷	※
杷柳、木通、藤、萩、蔓等の製品	※	煙草	2
筵席其の他	7	製革	※
藁製品	6	皮革製品	7
筆	※	刷子	※
墨	※	護謨製品	※
冠物	4	動物性脂油	6
内地草履	※	植物性脂油	7
朝鮮麻鞋	※	蠟燭	※
布帛製品	9	薬剤	5
鈕釦	※	石鹼	2
玩具	※	化粧品	4
農具（金属製品を除く）	※	洗濯曹達	※
養蚕具	※	染料	※
牛馬具（皮革製品を除く）	※	塗料	3
漁具	※	燐寸	2
網地	※	燐寸軸木	※
車輛	※	コークス	※
船舶	※	煉炭	※
酒類	8	肥料	6
酢	※	石粉	※
内地醬油	※	水豆腐	※
内地味噌	※	コールドール	※
麴	※	其の他(椎茸、鯛花、海老の花、蒲鉾を含む)	※
麴子	※	合計	189

注：表に示された品目名は、小分類での品目である。たとえば、繭製品に示される系列数「4」は、繭製品に属する細分類の品目が4品目あることを示す。また、細分類での品目が2つ以上のものは、原表にはその「計」が表記されるが、ここでは「計」を除いた系列数を示している。また、※印は、その品目に属する細分類の品目が存在しないことを示している。

年の数値はわずかな調整が必要な程度でほぼそのまま利用可能であると予想される。

以上の整理から、『経済雑誌』および『官報』は、調査結果そのものを表示したものであり、その種の情報をもとに整理されたものが『年報』であると推測される。したがって、『官報』および『経済雑誌』の利用には、多少の注意すべき点はあるものの、それらは『年報』で得られない「数量」についての情報を補充すると同時に、より詳しい品目に対する情報を与える資料として利用できることがわかる。

表1から得られる情報をもとに時系列での変化を吟味する際に問題となるのは、『年報』の1929年と1930年で示される品目に精粗が存在することである。1930年では、紡織工業、金属工業等の中分類で全体が10種類に分けられており、さらに小分類として、例えば紡織工業の場合では、製糸、綿糸、撚糸、広幅綿織物、小幅絹織物等の品目名が22品目示される。これに対して1929年では、(紡織工業等の分類が存在せず) 繭製品、綿糸、織物、編組物の4種類が示される<sup>(13)</sup>。「綿糸」のように両者に見られる品目もある一方で、他の多くの品目では接続のための工夫が必要とされる。1929年の「繭製品」は、「生糸」、「袖糸、玉糸類」「生皮苧、蛹襯類」であり、「糸」に関係する品目が並んでいる。一方で1930年について、「糸」に関係する品目は、「製糸」と「撚糸」である。それぞれの内訳は、「製糸」(内訳:「生糸」、「玉糸」、「野蚕糸」、「生皮苧」、「熨斗糸およびその他の製糸屑物)「撚糸」(内訳:「綿」、「麻」、「その他の撚糸および加工撚糸)である。このうち「生糸」、「玉糸」、「生皮苧」の品目は、1929年にも存在するので、残りの品目(「撚糸」、「野蚕糸」、「熨斗糸およびその他の製糸屑物)については、実効単価の動きを見ながら類似品目を統合して1929年の品目と接続することが考えられる。また、1929年の「編組物」は、「靴下」、「メリヤス製品」等であるので、1930年の品目である「[「シャツ」および「ズボン」下」(内訳:「綿」、「毛および毛綿)や、「靴下」(内訳:同)、「手袋」(内訳:同)を統合して接続することが検討される。このように1929年と1930年の品目を比較すると、1930年でより詳細な品目名で表示されているので、1930年の(実効単価の類似する)品目をある程度統合して、1929年の品目と比較することで品目の精粗の問題については解決が見込まれる。また、次節の表4で扱われる1910年代、1920年代の紡織工業の範囲においても品目の精粗が見られ、1921~23年については、繭製品、織物、編組物の形で品目がまとめられていること、1914年~17年については繭製品に関する数値が得られないこと等の問題があり、これらの問題についても個別品目ごとに対応が検討されなければならない。

### (3) 道別推計の概要

最初に、表1に見られる資料を利用して、道別合計の全朝鮮値に対するシェアを見てみよう。表3には、13道のシェアとともに、韓国の現在の領域に対応する「朝鮮南部」のシェアが1915年から5年ごとにまとめられている<sup>(15)</sup>。この表をみると、年の経過とともに南部のシェアが逐次低下するとともに、咸鏡南道の比重が大幅に増加していることが明らかになる。この背景には、日本資本による重化学工業の朝鮮北部への進出がありその傾向は日本の敗戦まで継続された<sup>(16)</sup>。

これらのシェアの計算は、表1に見られる資料の（全品目の）金額合計値をそのまま利用して作成されたものであり、より正確な数値を得るためには、個別品目ごとに、道別まで降りて数字のチェックを行うことが望ましい。このチェックの詳細な方法は、原（2008）で試みられた方法であり、そこでは1930年～40年について、金額、数量およびそこから計算される実効単価の動きについて道別に数値の吟味を行ったことは、既述のとおりである。この方法を1929年以前に適用する作業のうち、以下では例として、旧日本産業分類での紡織工業に関する全朝鮮値の金額、数量、実効単価の動きを見てみよう。（なお、表4には、紡織工業に属する多くの品目のうち、主要品目と思われる品目の全朝鮮値のみを示している<sup>(17)</sup>。表4は、全朝鮮値と13道について金額、数量、単価を計算した表から作成されたものである。参考として、表5には「生糸」について全朝鮮値と13道の金額、数量、単価が示されている。）

表4をみると、全朝鮮値での実効単価の動きは比較的安定しているが、道別に検

表3 道別合計の全朝鮮合計に対するシェア

	京畿道	忠清北道	忠清南道	全羅北道	全羅南道	慶尚北道	慶尚南道
1915年	25.2	4.0	4.7	5.8	7.9	8.7	11.6
1920年	27.5	2.1	4.7	4.5	7.5	10.2	9.4
1925年	24.6	2.4	3.8	3.7	9.0	12.8	9.9
1930年	27.8	1.6	3.5	3.6	7.7	12.7	12.1
1935年	20.2	1.3	2.6	3.3	5.6	7.9	12.2
1940年	18.9	0.9	1.7	2.8	4.9	5.2	8.6
	黄海道	平安南道	平安北道	江原道	咸鏡南道	咸鏡北道	朝鮮南部
1915年	7.4	6.7	5.3	4.7	5.8	2.2	68.9
1920年	4.8	8.4	6.5	8.0	4.3	2.1	69.3
1925年	6.1	12.1	5.3	4.0	4.2	2.1	66.9
1930年	4.0	10.5	4.8	3.1	6.0	2.6	68.7
1935年	5.6	9.0	3.3	3.9	19.8	5.1	54.4
1940年	6.8	8.7	3.4	5.5	23.2	9.4	45.7



表4 金額，数量，単価表（主要なもの）

金額表（単位：円）

			1911	1912	1913	1914	1915	1916	1917	1918	1919	1920
			1921	1922	1923	1924	1925	1926	1927	1928	1929	1930
			総数	総数	総数	総数	総数	総数	総数	総数	総数	総数
繭製品	生糸	円								2,490,934	5,126,492	4,659,783
繭製品	生糸	円				8,826,823	10,870,895	11,332,872	14,219,747	14,420,420	14,108,974	
	紬糸，玉糸類	円										
	紬糸，玉糸類	円								3,882,709	4,748,375	
	柞蚕糸	円								80,706	88,033	10,210
	柞蠶糸	円							9,700	18,400		
	生皮苧	円								310,449	113,408	124,172
	生皮苧蛹襯類	円				173,131	260,226	271,989	318,793	396,139	334,526	
	蛹襯	円								3,061	8,816	11,739
	蛹襯	円				32,721	31,944	43,755	52,432			
織物	綿布	円				2,759,757	3,020,155	3,625,685	5,798,965	10,232,545	16,620,010	9,970,131
	綿布（小巾物）	円				11,320,753	13,564,101	18,571,488	15,038,355	15,632,335	8,892,748	
	麻布	円				2,303,530	2,374,455	2,804,190	4,091,726	7,395,641	11,193,325	6,386,500
	麻布	円				2,271,055	7,214,281	7,465,728	8,087,227	8,221,951	7,074,410	
	絹布	円				622,893	582,528	740,973	1,053,588	2,080,135	2,844,352	5,018,072
	絹布（小巾物）	円				3,192,610	3,521,427	3,378,493	3,283,289	2,948,625	3,167,006	
	交織布	円				113,727	67,526	60,827	40,322	170,910	109,986	115,243
	交織布	円				74,348	145,195	131,452	142,333			
	織紐	円						79,492		170,772	228,921	104,318
	織紐	円				278,935	115,591	105,937	44,321	50,501	90,837	
編組物	靴下	円				66,981	73,060	145,220	188,886	430,450	485,638	282,443
編組物	靴下	円				1,768,364	2,788,562	2,412,233	2,267,153	2,479,888	2,682,102	
	手袋	円				1	70	2,490	2,800	29,735	6,588	5,324
	メリヤス製品	円				13,610	13,615	24,301	51,747	66,096	45,363	
	紐（織紐を除く）	円				109,590	124,552	147,312	260,729	338,598	366,165	195,100
	織紐及組紐	円				96,598	88,048	142,549	61,311	55,060	71,405	
	レース	円				172	7,887	6,837	13,400	37,426	50,376	30,128
	レース	円				26,825	14,053	6,876	8,584			

討を行うと、道によっては実効単価の動きが不安定であり、金額または数量の修正が必要と判断される箇所も存在する。例えば交織布の忠清北道（1918年，1919年）<sup>(18)</sup>、蛹襯の京畿道（1918年）、全羅北道（1918年，1927年）、絹布の全羅南道（1920年）等がそれにあたる。この例のように、道別に比較すると「異常値」が発見される場合であっても、全朝鮮値のみでの検討では「異常値の効果」が薄まってしまい、全

数量表

			1911	1912	1913	1914	1915	1916	1917	1918	1919	1920
			1921	1922	1923	1924	1925	1926	1927	1928	1929	1930
			総数	総数	総数	総数	総数	総数	総数	総数	総数	総数
繭製品	生糸	貫								33,356	43,396	52,831
繭製品	生糸	貫				88,750	108,507	138,699	180,789	179,827	171,977	
	紬糸, 玉糸類	貫										
	紬糸, 玉糸類	貫								87,144	87,111	
	柞蚕糸	貫								2,774	1,008	347
	柞蠶糸	貫							324	460		
	生皮苧	貫								136,958	5,393	7,715
	生皮苧蛹襯類	貫				16,841	23,143	22,392	33,333	0		
	蛹襯	貫								323	3,092	4,800
	蛹襯	貫				10,606	17,938	18,532	93,655			
織物	綿布	卷					17,741					
	綿布	匹					2,288,674					
	綿布	反					470	4,887,983	4,737,152	3,911,477	4,309,021	4,167,481
	綿布 (小巾物)	卷										
	綿布 (小巾物)	匹										
	綿布 (小巾物)	反				5,177,940	6,397,020	-	9,452,035	9,577,217	4,776,295	
	麻布	反				1,437,457	1,478,523	3,220,826	2,927,579	2,449,617	2,592,236	2,205,991
	麻布	反				2,711,098	2,403,927	2,826,899	2,742,221	2,786,345	2,906,990	
	絹布	反				0	719	256,655	268,987	263,428	258,081	527,876
	絹布	匹					141,295					
	絹布 (小巾物)	反				432,210	425,911	463,825	491,319	521,436	597,000	
	絹布 (小巾物)	匹										
	交織布	反				0	4,173	24,505	17,280	22,392	12,758	16,831
	交織布	匹					13,937					
	交織布	反				15,237	24,525	50,263	46,755			
	交織布	匹										
	織紐	箇						125,000		4,967,502	2,296,101	1,388,439
	織紐	個				177,964	133,940	-	557,600	696,539	595,087	
編組物	靴下	打				66,786	63,874	133,045	163,192	196,246	151,169	100,528
編組物	靴下	打				632,758	2,042,955	1,093,408	1,158,611	1,407,033	1,544,599	
	手袋	打				3	40	1,040	940	18,540	1,547	970
	手袋	打				1,305	1,362	10,385	30,531	0		
	紐 (織紐を除く)	箇				767,606	5,332,363	8,270,018	10,381,655	10,847,225	4,498,220	3,928,599
	織紐及組紐	箇				1,415,230	-	-	1,668,065	1,402,570	1,024,551	
	レース	箇				2,150	70,985	61,489	92,640	78,385	18,844	114,541
	レース	箇				45,750	13,650	18,185	3,128			

単価表@

			1911	1912	1913	1914	1915	1916	1917	1918	1919	1920
			1921	1922	1923	1924	1925	1926	1927	1928	1929	1930
			総数	総数	総数	総数	総数	総数	総数	総数	総数	総数
繭製品	生糸	@								74.7	118.1	88.2
繭製品	生糸	@				99.5	100.2	81.7	78.7	80.2	82.0	
	紬糸, 玉糸類	@										
	紬糸, 玉糸類	@								44.6	54.5	
	柞蚕糸	@								29.1	87.3	29.4
	柞蠶糸	@							29.9	40.0		
	生皮苧	@								2.3	21.0	16.1
	生皮苧蛹襯類	@				10.3	11.2	12.1	9.6			
	蛹襯	@								9.5	2.9	2.4
	蛹襯	@				3.1	1.8	2.4	0.6			
織物	綿布	@						0.7	1.2	2.6	3.9	2.4
	綿布 (小巾物)	@				2.2	2.1		1.6	1.6	1.9	
	麻布	@				1.6	1.6	0.9	1.4	3.0	4.3	2.9
	麻布	@				0.8	3.0	2.6	2.9	3.0	2.4	
	絹布	@						2.9	3.9	7.9	11.0	9.5
	絹布 (小巾物)	@				7.4	8.3	7.3	6.7	5.7	5.3	
	交織布	@						2.5	2.3	7.6	8.6	6.8
	交織布	@				4.9	5.9	2.6	3.0			
	織紐	@						0.6		0.03	0.10	0.08
	織紐	@				1.6	0.9		0.08	0.07	0.15	
編組物	靴下	@				1.00	1.1	1.1	1.2	2.2	3.2	2.8
編組物	靴下	@				2.8	1.4	2.2	2.0	1.8	1.7	
	手袋	@				0.3	1.8	2.4	3.0	1.6	4.3	5.5
	手袋	@				10.4	10.0	2.3	1.7			
	紐 (織紐を除く)	@				0.14	0.02	0.02	0.03	0.03	0.08	0.05
	織紐及組紐	@				0.1			0.04	0.04	0.07	
	レース	@				0.08	0.1	0.1	0.1	0.5	2.7	0.3
	レース	@				0.6	1.0	0.4	2.7			

体として間違った情報を提供する可能性がある。したがって、道別まで降りて数値をチェックする作業は、より正確な情報を得るためのひとつの有効な方法と思われる。

表4は、『経済雑誌』、『官報』にみられる数字を未修正のまま利用して作成されたものであり、先に述べた『年報』の数字との調整が必要であるほか、品目の精粗に

表5 生糸の金額, 数量, 単価

	1911	1912	1913	1914	1915	1916	1917	1918	1919	1920	1911	1912	1913	1914	1915	1916	1917	1918	1919	1920	
	1921	1922	1923	1924	1925	1926	1927	1928	1929	1930	1921	1922	1923	1924	1925	1926	1927	1928	1929	1930	
	総数	総数	総数	総数	総数	総数	総数	総数	総数	総数	京畿道	京畿道	京畿道	京畿道	京畿道	京畿道	京畿道	京畿道	京畿道	京畿道	
生糸(貫)								3356	4396	52831									4135	5682	4598
生糸(円)								2490934	5126492	4659783									348371	681949	358320
生糸(@)								74.7	118.1	88.2									84.2	120.0	77.9
生糸(貫)				88750	108507	138699	180789	179827	171977					8448	11061	24005	31342	35805	34446		
生糸(円)				8826823	10870895	11332872	14219747	14420420	14108974					720201	1179370	2332947	2781125	2878625	3067403		
生糸(@)				99.5	100.2	81.7	78.7	80.2	82.0					85.3	106.6	97.2	88.7	80.4	89.0		
	忠清北道	忠清北道	忠清北道	忠清北道	忠清北道	忠清北道	忠清北道	忠清北道	忠清北道	忠清北道	忠清南道	忠清南道	忠清南道	忠清南道	忠清南道	忠清南道	忠清南道	忠清南道	忠清南道	忠清南道	忠清南道
生糸(貫)								664	485	994									1068	1128	1760
生糸(円)								61080	48625	65819									69245	106951	123949
生糸(@)								92.0	100.3	66.2									64.8	94.8	70.4
生糸(貫)				1431	1575	2143	2316	451	670					3441	2470	6617	14062	17313	18199		
生糸(円)				98281	141829	151706	134432	30215	46800					291991	162429	559911	1122339	1366845	1466315		
生糸(@)				68.7	90.1	70.8	58.0	67.0	69.9					84.9	65.8	84.6	79.8	78.9	80.6		
	全羅北道	全羅北道	全羅北道	全羅北道	全羅北道	全羅北道	全羅北道	全羅北道	全羅北道	全羅北道	全羅南道	全羅南道	全羅南道	全羅南道	全羅南道	全羅南道	全羅南道	全羅南道	全羅南道	全羅南道	全羅南道
生糸(貫)								813	1640	1272									1024	2978	3395
生糸(円)								45523	134757	38195									59689	325599	170162
生糸(@)								56.0	82.2	30.0									58.3	109.3	50.1
生糸(貫)				2421	3431	11031	6807	12843	15214					3781	4377	4819	13888	22541	17176		
生糸(円)				163613	322490	729676	429921	1117384	1181755					225582	337524	388186	1398454	2156804	1400520		
生糸(@)				67.6	94.0	66.1	63.2	87.0	77.7					59.7	77.1	80.6	100.7	95.7	81.5		
	慶尚北道	慶尚北道	慶尚北道	慶尚北道	慶尚北道	慶尚北道	慶尚北道	慶尚北道	慶尚北道	慶尚北道	慶尚南道	慶尚南道	慶尚南道	慶尚南道	慶尚南道	慶尚南道	慶尚南道	慶尚南道	慶尚南道	慶尚南道	慶尚南道
生糸(貫)								12747	18066	27395									1367	966	1079
生糸(円)								1040434	2384930	3145232									113382	117996	81177
生糸(@)								81.6	132.0	114.8									82.9	122.1	75.2
生糸(貫)				45181	62490	61588	73102	6542	66059					1230	1688	2637	3470	4802			
生糸(円)				5423097	7020483	5235114	5882412	5308702	5151741					96080	112830	183524	228154	301454			
生糸(@)				120.0	112.3	85.0	80.5	81.0	78.0					78.1	66.8	69.6	65.8	62.8			
	黄海道	黄海道	黄海道	黄海道	黄海道	黄海道	黄海道	黄海道	黄海道	黄海道	平安南道	平安南道	平安南道	平安南道	平安南道	平安南道	平安南道	平安南道	平安南道	平安南道	平安南道
生糸(貫)								236	2819	970									4488	4258	371
生糸(円)								13372	62417	72909									362804	510950	51139
生糸(@)								56.7	22.1	75.2									80.8	120.0	137.8
生糸(貫)				1273	1382	1648	2877	0	593					8788	8377	12738	20487	11750	10720		
生糸(円)				66074	74232	123620	142384	0	44483					837619	727250	847437	1383641	940000	924757		
生糸(@)				51.9	53.7	75.0	49.5		75.0					95.3	86.8	66.5	67.5	80.0	86.3		
	平安北道	平安北道	平安北道	平安北道	平安北道	平安北道	平安北道	平安北道	平安北道	平安北道	江原道	江原道	江原道	江原道	江原道	江原道	江原道	江原道	江原道	江原道	江原道
生糸(貫)								2429	2754	6227									2498	1306	1639
生糸(円)								177292	445306	417711									103843	109738	66297
生糸(@)								73.0	161.7	67.1									41.6	84.0	40.4
生糸(貫)				4805	4889	5054	4949	0						1674	1467	2985	3006	1701			
生糸(円)				430799	417017	390991	302479	0						106273	92407	186720	152360	76329			
生糸(@)				89.7	85.3	77.4	61.1							63.5	63.0	62.6	50.7	44.9			
	咸鏡南道	咸鏡南道	咸鏡南道	咸鏡南道	咸鏡南道	咸鏡南道	咸鏡南道	咸鏡南道	咸鏡南道	咸鏡南道	咸鏡北道	咸鏡北道	咸鏡北道	咸鏡北道	咸鏡北道	咸鏡北道	咸鏡北道	咸鏡北道	咸鏡北道	咸鏡北道	咸鏡北道
生糸(貫)								1378	1048	954									509	266	2177
生糸(円)								73527	162078	5906									22372	35196	62967
生糸(@)								53.4	154.7	6.2									44.0	132.3	28.9
生糸(貫)				5431	4355	2242	2502	6205	8900					837	945	1192	1981	874			
生糸(円)				306640	211399	121773	138360	219084	825000					60574	71635	81267	124688	24978			
生糸(@)				56.5	48.5	54.3	55.3	35.3	92.7					72.4	75.8	68.2	62.9	28.6			

関する調整も必要である。ただし、紡織工業については、現段階の数字であっても実効単価の動きは概ね安定しており、このことは今後作業を進める際のひとつの安心材料といえる。

今後は、上記のさまざまな問題に対処しつつ、紡織工業以外の他の工業についても同様の作業を行い、個別に数値のチェック、吟味を行っていく。

### 注

- (1) 第2次世界大戦前の朝鮮半島の地域についてわが国では「朝鮮」の呼称が使用されるが、韓国では戦前期を含め「韓国」と呼ばれている。この呼称の選択には、南北2国の名称にもかかわる複雑な要素があるが、ここではこの問題に深入りする意図は無い。本論ではわが国での慣習に従って「朝鮮」の用語を使用することにする。
- (2) Kim, Nak Nyeon (ed) (2006) *Economic Growth of Korea, 1910-1945*, Seoul National University (in Korean).
- (3) 先駆的な研究としてはKuznets, Simon (1971) *Economic Growth of Nations: total output and production structure*, Belknap Press of Harvard Universityがあげられるが、それを発展させたMitchell, B.B. (1983) *International Historical Statistics, 1750-1980*, M. Stockton Press, Maddison, Angus (1995) *Monitoring the World Economy, 1820-1992*, OECDがあげられる。
- (4) 主要な既存の研究としては、李潤根 (1971) 「韓国国民所得推計の内容」, 『日帝下の民族生活史』民衆書店、溝口敏行 (1975) 『台湾朝鮮の経済成長』, 岩波書店、Suh, Sang-chul (1978) *Growth and Structural changes in the Korean Economy*, Harvard University Press、溝口敏行・梅村又次 (編) (1988) 『旧日本植民地経済統計——推計と分析』, 東洋経済新報社があげられる。
- (5) 第2次世界大戦前の旧日本植民地に関する年報類としては、本文の2書のほかに『関東庁統計書』, 『樺太庁統計書』, 『南洋群島統計年報』がある。
- (6) 原康宏 (2008) 「台湾・韓国における鉱工業長期生産系列の吟味」, (広島経済大学博士学位請求論文)。
- (7) 朴基柱「鉱業・製造業」, Kim, (2006) 第4章 (韓国語)。
- (8) この統計資料の収集に当たっては高橋益代氏のご協力を得て、韓国政府のデータベースを参照した。なお私が指摘している資料の中で、『経済雑誌』に表示されている1923年表は現在まで入手していない。
- (9) 1911年の情報は1913年刊行の『年報』より得られる。1912, 1913年の情報は、それぞれ1913年, 1914年刊行の『年報』に示されるが、そこでは「工場」に関する表が示されるのみであり、「工産品」に関する表は含まれていない。また1911年の情報は、1914年の年報 (1916年刊行) に「工産品」統計の累年比較として (工産品すべての) 道別合計値がえられるが、ここに示される1911年の値は、1913年刊行の『年報』の1911年値と大きく異なっている。したがって対象期間を1914年以降として作業を行うこととする。
- (10) 品目ごとに「数値のある道」を示す形式であるため、例えば『経済雑誌』144号に見られる品目、「船舶」では「全北」が2つ示されていたり、「清酒」や「焼酎」では、他の

品目と道の並びが異なっていたりする問題がみられる。

- (11) 例えば、「内地式提燈」の品目があげられる。
- (12) 例えば、「帳簿」や「紬糸、玉糸類」があげられる。
- (13) これら4品目の合計（全朝鮮値）は54,113,603円であり、1930年の「紡織工業」合計（全朝鮮値）は、45,693,076円である。したがって、1929年の4品目と1930年の「紡織工業」との対応関係については、慎重な判断が要求されよう。
- (14) 綿糸の金額（全朝鮮）は、1929年：1,508,464円、1930年：4,518,116円で大きく異なっている（両者とも慶尚南道のみで生産）ので、注意が必要である。
- (15) 朝鮮南部の範囲は忠清北道、忠清南道、全羅北道、全羅南道、慶尚北道、慶尚南道の全体と京畿道の一部、江原道の一部である。なお後者については、文浩一(2005)「植民地朝鮮の南北人口比—朝鮮総督府国勢調査資料の分割フォーマット」、(21世紀 Hi-Stat プロジェクトの DP として発表) の人口比率を利用した。
- (16) 日本領有化の朝鮮北部の重化学工業化については木村光彦・安部桂司(2003)『北朝鮮の軍事工業化』、知泉書店参照。
- (17) 紙面の制約のため、表4として主要品目の全朝鮮値を、表5として「生糸」の全朝鮮値と13道について金額、数量、単価を示したが、これらの表とは別に紡織工業に属する全品目について全朝鮮値と13道の金額、数量、単価を計算したD1表がある。D1表を必要とされる場合には、提供の用意があるので連絡されたい。
- (18) 絹布を道別に見ると、忠清北道において、1916年(230反, 274円)、1917年(412反, 1,006円)、1918年(411反, 11,543円)、1919年(439反, 12,880円)、1920年(1,460反, 6,370円)の数字が示される。この数値から実効単価を計算すると、それぞれ1.2, 2.4, 28.1, 29.3, 4.4の単価を得る。1918年、1919年について実効単価が急激に変化しているが、その原因は同年における金額の急増であり、この場合では金額の修正が検討される。